

# 國學院大學學術情報リポジトリ

Book Review : Sarah Anne Carter, Object Lessons : How Nineteenth-Century Americans Learned to Make Sense of the Material World, Oxford University Press, 2018.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Takaya, Keichi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000547">https://doi.org/10.57529/00000547</a>

書評：Sarah Anne Carter, *Object Lessons: How Nineteenth-Century Americans Learned to Make Sense of the Material World*, Oxford University Press, 2018.

高屋景一

1.

「オブジェクト・レッスン」は、スイスの教育者ペスタロッチ (Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827) の教育理念と理論 —— 一般に「直観教授」と呼ばれている —— を学校の一斉教授に応用した教授法であり、イギリス経由でアメリカ合衆国およびカナダに伝播する過程で19世紀半ば頃に確立された。このことは教育史の基礎知識に属する。わが国では明治期に、御雇い外国人教師マリオン・スコット (Marion McCarrell Scott, 1843-1922) や高嶺秀夫 (1854-1910) らによって「庶物指教」「実物教授」「開発教授」の名称で導入された。書物に記された言葉を復誦し覚えこませる教師中心、教科書中心、言語中心の方法 (recitation) に対して、児童生徒の観察と経験を通じて、より実質的な知識を効果的に学ばせる方法として一般に理解されている。19世紀半ば以降、義務就学制が各国で採用されるものの、一人の教師が多人数の生徒を教えるための方法が確立しておらず、教師個人の (多くの場合不十分な) 知識と経験に頼っていた教育職にはじめて専門性を与えた教育理論という歴史的意義がある。

しかし、教育学の基礎知識とは言うものの、果たして我々はオブジェクト・レッスンのことをどれだけ知っているのだろうか。児童の知的道徳的発達についてどのような理念や見通しを持ち、どのような教材や教具 —— 実物 (objects) —— を用い、どのような手順や活動が含まれたのか。

このように問うと、実は、我々はオブジェクト・レッスンのことをほとんど知らない。教科書的なとおり一遍の説明、つまり、上に書いたことに加え、イギリスのメイヨー兄妹 (Charles Mayo, 1792-1846, Elizabeth Mayo, 1793-1865) からアメリカのオスウィーゴ運動の主導者エドワード・シェルドン (Edward Austin Sheldon, 1823-1897) へとわたる過程で、図画と問答を用いる画一的な手順に矮小化されてしまったと評価されることがほとんどである<sup>(1)</sup>。そして、オブジェ

クト・レッスンはヘルバルト主義および進歩主義への前史として片付けられ、それら新たな教育理論・実践への連続性という観点からは、きちんと検証されているとは言い難い。

確かにオブジェクト・レッスンやペスタロッチ主義は、いまさら見直したところで、授業の改善に直結するような新たな知見が得られる見込みはないのかもしれない。その意味で、歴史上の一エピソードとして顧みられることがないのも、一応は納得できる。しかし、ペスタロッチの人氣がいまだに高い我が国において、子どもへの献身の象徴としてペスタロッチを崇めるだけでなく、不器用ながらも——ルシール・シュルツは、ペスタロッチ主義はペスタロッチ本人があつたにも関わらず成功したと言えるかもしれない、とまで書いている<sup>(2)</sup>——自らの経験や工夫を理論化したペスタロッチと、それを体系的な方法論としてまとめ、応用しようとした彼の後継者たちの活動を通じて、理念がいかに理論に翻訳され、実践に移されるのかという経緯を観察する絶好の教材である。オブジェクト・レッスンの歴史は、教育研究者にとって絶好のオブジェクト・レッスンなのである。

オブジェクト・レッスンは、今で言う体験学習や視聴覚教材を使った学習の元祖で、ただ名辞のみを暗記するのではなく、言葉の意味にまでさかのぼって学ぼうとする方法である。言葉を実際の事物またはその図画と結びつけて学ぶ方法はコメニウス (Johannes Amos Comenius, 1592-1670) などの先例があるゆえに、ペスタロッチが発明したとまでは言わないが、ペスタロッチ主義者たちが広めたのは間違いない。ただ名辞を学ぶだけではなく、ペスタロッチが「暗い直観から、明晰な概念に」と言ったように<sup>(3)</sup>、雑多な事物を整理して理解したり、観察や思考の方法を学ぶなど、当時の教育水準を考えれば、かなり先進的な試みであった。

## 2.

本書 *Object Lessons: How Nineteenth-Century Americans Learned to Make Sense of the Material World* (オブジェクト・レッスン —— 19世紀のアメリカ人は、いかにして世界の事物を理解する術<sup>すべ</sup>を学んだか) は、オブジェクト・レッスンの理念、方法、教材、そして19世紀半ばから後半にかけてのアメリカ社会に与えた影響を、綿密な調査にもとづいてつまびらかにしており、ペスタロッチ主義のみならず、アメリカ教育史、そして広く教育史研究にとっての重要文献である。

著者サラ・カーターは現在ウイスコンシン大学 (ミルウォーキー) に所属しているが、本書出版当時はアメリカ合衆国の物質文化 (material culture) を研究するチップストーン基金<sup>(4)</sup>でキュレーターおよび研究主任を勤めていた。このような経歴を持つ研究者らしく、国内外の図書館や博物館をあたって、実際に使

用された事物の写真なども収集し、オブジェクト・レッスンの実像を立体的に描いて見せている。

本書の妻さは、オブジェクト・レッスンを、ペスタロッチ主義の普及という文脈に限って説明しているだけではないところにある。我々が知っているようで知らない具体的な細部を明らかにし、さらに、後に述べるように、オブジェクト・レッスンをアメリカの物質文化の歴史的な文脈において、その社会的な広がりをもたどっている。約140ページと短くまとめられてはいるが内容は濃く、ペスタロッチの理論、それをイギリスに伝えたメイヨー兄妹と本国および植民地学校協会（Home and Colonial School Society：名称は年代により多少の変遷がある）、そしてオスウィーゴ師範学校（Oswego Normal School：現在のニューヨーク州立大学オスウィーゴ校）の概要から、オブジェクト・レッスンがどこでどのように展開されたのか、どのような教材が製造販売されたのか、さらにのちのヘルバルト主義や進歩主義との連続性にまで目を配っている。

## 目次

Prologue: A Box of Ideas

Introduction: Reason from Things

1. Windows and Ladders
2. Thinking with Things
3. Picture Lessons
4. Object Lessons in Race and Citizenship
5. Objects and Ideas

Epilogue: Method over Matter in the Twenty-First-Century Classroom

本書の前半（第1章と2章）では、ペスタロッチ主義の概要および伝播の過程を、本国および植民地学校協会からオスウィーゴへといつながりを中心にとどり、ペスタロッチ主義の理念と方法、そしてオブジェクト・レッスンの実際の手順や教材について具体像を明らかにしている。

ペスタロッチ主義の方法を英米圏に——そして日本にまで——普及する上で大きな影響力を持ったのは、イギリスの本国および植民地学校協会である。この協会はもともと1836年に幼児教育の改善と普及、さらに幼児学校（infant school）の教員養成を目的としてイギリス国教会の精神を礎に設立された<sup>(5)</sup>。メイヨー兄妹はこの協会設立に力を貸し、特に妹のエリザベスが教員養成部門を主導した。

アメリカ合衆国およびカナダには、ジョセフ・ネーフ（Joseph Neef, 1770-1854）のような教師、そしてヘンリー・バーナード（Henry Bernard, 1811-1900）やイガートン・ライアソン（Egerton Ryerson, 1803-1882）のような行政

官の手によって、すでにペスタロッチ主義が紹介されていた。しかしその普及に決定的な影響を持ったのは、シェルドン校長率いるオスウィーゴ師範学校であろう。1860年代から80年代にかけてのいわゆるオスウィーゴ運動である。シェルドンは本国および植民地学校協会から送ってもらった人物や教材の力を借りてオブジェクト・レッスンを研究し、ある程度自己流に解釈し、広めた。本書は、このメイヨー兄妹からシェルドンへという伝播と変容の過程を、エリザベス・メイヨーの作成した教科書とそれに若干の修正と工夫を加えたシェルドン、そしてその他アメリカのペスタロッチ主義者（たとえばマリオン・スコット）の教科書とを比較しながら紹介している。

オブジェクト・レッスンは、のちに形骸化した方法の代名詞のように言われるようになった。たとえばジョン・デューイは『学校と社会』で、オブジェクト・レッスンは基本的に知識を与えるための方法に過ぎないと切り捨てている：

実物教授というものは、知識を与えるためにもくろまれたものであるが、その実物教授をどれほど頻繁にやってみたとところで、農場やガーデンで実際に植物や動物と共に生活し、その生活をしているうちに身につき、その動植物に精通するような知識には、とうてい代わりうるものではない。学校でどれほど感覚器官の訓練をしたところで、それがただの訓練のために採り容れられたものであるかぎり、その種の訓練は、日頃よくわかっている仕事に馴染み、興味をもつことからもたらされ、快適に充実した感覚生活とは、とうてい比べようもない<sup>(6)</sup>。

しかしオブジェクト・レッスンは、多少の読み書きができれば教師になれた時代にあって、教授理念と理論とを提供し、教職に専門性を与えるのに貢献したと、少なくとも言える。さらに、本書が明らかにするように、それは単に知識の習得の効率化を目指しただけのものではなかった。だがデューイと同様、多くの教育研究者は、オブジェクト・レッスンの豊かな理念と方法を見落としてきたのである<sup>(7)</sup>。

ペスタロッチ主義にはオブジェクト・レッスンに代表される教授法としての意義と、それを支える愛情に満ちた環境——ペスタロッチ自身が居間の教育と呼んだもの<sup>(8)</sup>——の重視という二つの側面があるのだが、オブジェクト・レッスンはこの両者を切り離し、前者に特化して、知識を手っ取り早く増す方法として教師に伝えられたことで形骸化したと従来評価されてきた<sup>(9)</sup>。カーターの目的はペスタロッチ主義に対する歴史的評価の妥当性を論じることではないのだが、本書を読むと、従来の評価を見直す必要を感じさせられる。その中心となる論点は、オブジェクト・レッスンは単に知識量を増やす方法ではなく、じっくりと考える態度を育み、そして思考の技術を学ばせる方法だということである<sup>(10)</sup>。

オブジェクト・レッスンが広まる1860年代以前に、教室における絵や図の使用はすでに行われていたのだが、名辞の記憶の補助という程度で、知覚の訓練の要素は入っていなかった<sup>(11)</sup>。しかしオブジェクト・レッスンの影響で行われた図画の使用は、図画を単なる実物の代用として用いるだけでなく、言葉と同様、抽象化の方法として見ていた<sup>(12)</sup>。つまり、オブジェクト・レッスンは、知識を効率的に増やすための教授法というだけでなく、五感（特に視覚）でとらえられる事物の観察を通じて、五感ではとらえられない理性的思考の領域、つまり分類、比較などの作業を通じて物事の意味へといたる、思考の力を鍛える教授法なのである<sup>(13)</sup>。「暗い直観から、明晰な概念に」と言うとおりでである。

さらに、少なくともシェルドンと彼が依拠したメイヨー兄妹において、オブジェクト・レッスンは宗教的な情操教育や道徳教育を重視するものでもあったことを付け加えておいてよいだろう<sup>(14)</sup>。

オブジェクト・レッスンが生徒の知的道徳的発達について何を指し、そこにいたるためのどのような見取り図を描いていたかということは、その具体的な手順等を見ることによって明らかになる。

オブジェクト・レッスンは事物の観察をする（直観する）という部分しか一般には知られていないが、最終的にはそのような事物についての作文へと児童生徒を導くものであった。オスウィーゴ師範学校において、シェルドン校長は、生徒と会話ないし問答をしながら事物の性質を適切に描写し、そのようにして整理充実させた情報を適切な文脈に位置づける指導の方法を、教員志望者に訓練した<sup>(15)</sup>。

教師はオブジェクト（例えば亜麻、ゴム、錫など）を生徒の前に置き、慎重な質問を通じていろいろなことに気づかせる。対象物の性質を観察したあと、産地、商品になるまでの過程、流通、現代社会における使用法、さらには歴史的な使用法などへと学習を進め、最後に作文へといたる。この方法により、例えばデューイが「見慣れたものを、新たな光にあてて見る」と言ったのと同様のことが目論まれていたように思われる<sup>(16)</sup>。すると、デューイは批判的だったが、実のところ、オブジェクト・レッスンは、デューイや進歩主義者達とほぼ同じことを目指していたか、少なくとも連続性を持つ教育理念・方法を備えていたということになる。

確かに、オブジェクト・レッスンは、オスウィーゴの教員の中にも批判的な者が出たほど形骸化していたところもある。また、教員により理解や技術の程度に差があったことも否めない<sup>(17)</sup>。オスウィーゴ師範学校の歴史を書いたドロシー・ロジャースは、教員の一人ヘンリー・ストレイト（Henry Straight, 1846-86）が、オスウィーゴの形骸化した方法に嫌悪感すら感じていたと記している<sup>(18)</sup>。

先に言及したルシール・シュルツは、オブジェクト・レッスンの根幹である経験ないし体験にもとづく教育という考え方が広く作文教育にも波及したという点を詳細にたどっている。生徒が自らの経験を題材に作文する教育は、通説では20世紀に入ってから大学で始まったとされるが、彼女によればすでに19世紀に初等

中等教育の学校で始まっており、その理由の一つはペスタロッチ主義の影響である<sup>(19)</sup>。生徒の社会的階層が限られていた大学に比べて、生徒が一般大衆に広まっていた公教育の学校においては、教育方法の改革が先んじて行われており、作文教育にその一端がよく見られると言う<sup>(20)</sup>。生徒の観察や経験を重視するオブジェクト・レッスンの到達点が作文であったというカーターの記述は、この点を補強するものである。

本書の後半(第3～5章)では、オブジェクト・レッスンが通常知られているより広く社会に影響を与えた点が描写されている。

「オブジェクト・レッスン」という言葉は今日英語圏において、その教育史的来歴を知らない人でも用いる、広く人口に膾炙した表現となっている。実体験によって身をもって知ることや、知るきっかけになった経験を指す。この歴史的背景として、オブジェクト・レッスンの方法が、かなり広範囲で応用されたという事情が挙げられる。学校で広く用いられた方法であることに加え、例えば黒人やネイティブ・アメリカンの師範教育を行ったハンプトン・インスティテュート(Hampton Institute: 現在のハンプトン大学)、カタログ販売が出てくる前のトレード・カード<sup>(21)</sup>における使用、さらにはコマーシャルの宣伝文句や政治家の演説にまで登場する。

### 3.

日本の教育学研究ではいまだに根強い人気を誇るペスタロッチとペスタロッチ主義だが、英米圏では今日ほとんど顧みられていない。ギューテック(Gerald L. Gutek, 1935-)はその中であって例外的な存在だが、本人曰く、自分は古いから、だそうである<sup>(22)</sup>。そのくらい、ペスタロッチやペスタロッチ主義の研究者は少ない。しかし、本稿で紹介したカーターの近著、さらにシュルツの研究など、思想史や教育理論史ではなく、社会史的な側面からペスタロッチ主義の伝統や諸側面を取り上げる研究が、少数ではあるが存在する<sup>(23)</sup>。日本では英米系のペスタロッチ主義研究が少ないので、このような研究が知られていないという事情もあるが、ペスタロッチ主義をこれまでとはまた別の角度から捉え直すことができ、それによって教育史研究の厚みが増すのではないか。

これまで教育史の一エピソードとして片付けられがちであったオブジェクト・レッスンを、カーターやシュルツの研究を踏まえてとらえ直すと、次のような歴史的な流れが見えてくる。

通底する理念は、子どもが直接知らないことを言葉のみに頼って教師主導で学ばせるという教育への批判である。そして、直接経験から学習を始めるという、コメニウス、ジョン・ロック、そしてジャン＝ジャック・ルソーの経験主義的な教育の伝統が形成されるなかで、ペスタロッチ主義のオブジェクト・レッスンが

生まれ、たとえば子どもの身近な経験を題材にとった作文教育へと取り入れられ、そのような実践と理論がのちの進歩主義の経験主義的教育、児童中心主義を準備した。このように考えた場合、オブジェクト・レッスンの具体像をつまびらかにした本書のような研究は、近年ではあまり顧みられない歴史の一局面に新たな光をあて、より豊かな教授法発達史を描いてくれる、重要な研究である。

## 注

- (1) E.g. Gerald L. Gutek, *Pestalozzi and Education*. Prospect Heights, IL: Waveland Press, Inc., 1999, pp.159-160.
- (2) Lucille M. Schultz, *The Young Composers: Composition's Beginnings in Nineteenth-Century Schools*, Southern Illinois University Press, 1999, p.59.
- (3) ベスタロッチ『ゲルトロートは如何にしてその子等を教うるか；学園講演集』、『世界教育法典 ベスタロッチ全集 第3巻』, 鯨坂二夫・四本忠俊訳, 玉川大学出版部, 1952, p.101.
- (4) The Chipstone Foundation, <http://www.chipstone.org>
- (5) Home and Colonial School Society, *The Quarterly Educational Magazine and Record of the Home and Colonial School Society*, Vol.1, 1848, Introduction, p.4  
([https://books.google.co.jp/books?id=PrQEAAAQAAJ&pg=PA1&hl=ja&source=gbs\\_toc\\_r&cad=3#v=onepage&q&f=false](https://books.google.co.jp/books?id=PrQEAAAQAAJ&pg=PA1&hl=ja&source=gbs_toc_r&cad=3#v=onepage&q&f=false) より取得)；村山英雄『オスウィーゴー運動の研究』, 風 間書房, 1978, p.217; John Mann, *Highbury Fields: The "most interesting" school in London*, Edgeley Publications, 1994, p.41.
- (6) ジョン・デューイ『学校と社会・児童とカリキュラム』, 市村尚久訳, 講談社, 2013, p.68 (傍点筆者)。
- (7) Carter, pp.135-6.
- (8) 長田新訳『隠者の夕暮れ シュタンツ便り』, 岩波書店, 1992, p.52.
- (9) E.g. Gutek, pp.157-8; Christine A. Ogren, *The American State Normal School*, Palgrave MacMillan, 2005, p.35.
- (10) Carter, p.136.
- (11) 同, pp.68-9.
- (12) 同, p.68.
- (13) 同, p.121.
- (14) 同, pp.56, 62.
- (15) 同, p.122.
- (16) John Dewey, *How We Think* (Revised Edition, 1933), in *The Later Works*, Vol.8, Jo Ann Boydston (Ed.), Southern Illinois University Press, 1986, p.278.
- (17) Carter, p.50.
- (18) Dorothy Rogers, *Oswego: Fountainhead of Teacher Education: A Century in the Sheldon Tradition*, New York: Appleton-Century-Crofts, Inc., 1963, p.53. 高嶺も習ったヘンリー・ストレイトは優秀な教員だったようだが、のちにフランシス・パーカーのクック郡師範学校 (Cook County Normal School) に移る。たとえばロジャーズは以下のように述べている：“[Francis Parker] attributed to Straight his own interest in correlating subject matter”; “Parker often said that the best primary work he ever saw was under Straight’s direction” (Rogers, pp.53-4)。パーカー自身、自著 (*Talks on Pedagogics*, 1894) の前書きに、中心統合法の着想へのストレイトの貢献について書いており、この辺りにも、進歩主義との連



続性が感じられる。Cf. also, James Johonot, “The Story of a School,” *Popular Science Monthly*, Vol.34, February 1889.

([http://en.wikisource.org/wiki/Popular\\_Science\\_Monthly/Volume\\_34/February\\_1889/The\\_Story\\_of\\_a\\_School](http://en.wikisource.org/wiki/Popular_Science_Monthly/Volume_34/February_1889/The_Story_of_a_School) より取得)。ちなみにヘンリーの妻エマ (Emma Dickerman Straight) は高嶺の要請に応じ、高等師範学校女子部で英語を教えたと伝わっている。

- (19) Schultz, pp.55, 57.
- (20) 同, p.147.
- (21) Trade card. 名刺より多少大きいくらいのカードで、商品の宣伝などの目的で19世紀末に盛んに使われた。
- (22) 以前、とある学会でお会いした際に、ご本人から直接うかがった。
- (23) この他にも、たとえばベスタロッタ主義を視覚映像文化や博物館教育の文脈でとらえ直しているものに Karen Stanworth, *Visibly Canadian: Imaging Collective Identities in the Canadas, 1820-1910*, Montreal, Quebec, and Kingston, Ontario: McGill-Queen's University Press, 2014.